



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

風土とモラル(四)：和辻倫理学ノート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-20 キーワード: 作成者: 津田, 雅夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/4465">http://hdl.handle.net/20.500.12099/4465</a>

## 風土とモラル (四)

—— 和辻倫理学ノート ——

津 田 雅 夫

Climate and Morality(4)

—— Some Reflections on Watsuji's *Rinrigaku* ——

Masao TSUDA

風土論をめぐって

(一)

前節までの論考において、最初にまず、和辻の思想営為を貫く根本動機とも言うべき志向を探るべく、彼の時代認識や歴史意識が顕著に窺われる著作・論文について検討を行い、そこから暫定的にはあるが、その根本動機を「語られざる国民的自覚」もしくは「イデオロギー化せられざる国民主義」のうちに見いだした。

そして次に、和辻の思想が昭和5年前後に〈国民道徳論体系〉と名づけられるべき構想として具体化・体系化されたことを、当時の草稿・メモを中心に解明した。従来、和辻の業績として風土論や倫理学体系や日本倫理思想史がともすれば個々に評価されがちであったが、それらは〈国民道徳論体系〉の諸契機として正当に位置づけられ、また、相応しく性格づけられるべきことを明らかにした。

最後に、こうした体系構想の成立を促した主要契機の一つとして、〈マルクス主義〉との対決があったことを重視し、河上肇との論争のうちに対決の具体的な断面を探ってみた。彼らの対立の背後には、和辻におけるロシア革命への一貫した関心とその関心を生み出す動機として、近代日本の資本主義的近代化への反発と社会主義及び共同主義への志向(＝共感)の存在すること(同時にそれらは河上肇も共有していたわけであるが)が指摘される。ここから、理論的にはマルクス思想への持続的な関心が形成され、実践的にはロシア革命の過激な「革命主義」への敵対をめぐって河上との論争を誘発させる問題意識も生じ

てきたのである。

輪郭だけではあったが、以上のような確認を序論部分として提示したうえで、本章より各論に入っていくことにする。

ここではまず、和辻の風土論を検討することにする。いったい何故、そもそも風土論を切り口として論議を開始しようとするのか。この問いは、同時に和辻の思想体系（の構築）にとって風土論がどのような位置を占めるのかという問いと不可分に結びついている。和辻は昭和2年2月17日、ドイツ留学へと旅立つ。それまでに彼は、『古寺巡礼』（1919年）、『日本古代文化』（1920年）を始めとして、『日本精神史研究』（1926年）に収められる諸論文を書き続け、既に＜日本回帰＞を果たしていたわけであり、日本文化や歴史伝統についての思索を永く巡らせてきた。

にもかかわらず、この留学は和辻にとって画期的であった。なぜなら留学経験は、先回りして言えば、彼の問題意識の核心をなす事柄、すなわち近代日本の世界史的な位置づけとその問題点について、また、その改革の展望と結びついた国民共同の新たな形態について、さらには、そうした課題を果たすうえでの対案を提起しているように見えたロシア・マルクス主義との対決について、これらすべての課題関心が焦点を結び結晶化するうえでの触媒の役割を果たしたからである。

そもそも、和辻にとって切実な形で日本の＜国民性＞の問題が中心的課題として視野に入ってきたのが、まさにこの留学を契機としてであったことを、以下の「国民性の考察」と題された講義ノート（帰国後すぐさま始められ昭和3年9月より同4年2月に至る〔京大での〕講義の草案）の一節は明快に語ってくれている――

東亜細亜に於いて注目すべきNationは日本と支那と印度である。さうして日本の国民性は結局自分の関心の中心にある。然し日本を出るとき自分にはこの問題は起きてゐなかつた。この問題に聯環して日本が特に興味深い国であることも自覚してゐなかつた。然るに東亜細亜欧州の諸国土を見て廻つて日本に帰來した時、自分には日本の山川風土、風俗、人間の性格などが実に珍しく特異なものに感ぜられた。旅行中いづれの国に行つたときにも、これほど強く珍しさを感じた事はない。従つて日本は自分の出発点であると共に印象記の最後に来べきものである。<sup>1)</sup>

初めての外国留学の直接的な印象を割り引くにせよ、ここには「問題発生の地盤としての自分の経験」<sup>2)</sup>の核心とその意義が鮮明に語られている。留学経験によって触発された風土論の研究は、なによりも現代日本の特異性への驚嘆から、すなわち「実に珍しく特異なもの」としての現代日本を解明したいという動機から出発したのであり、それが探究の起点を画するとともに、その帰結（＝目的）をなすことにもなった。ここから、すべてはこの特異な日本の「国民性」について、その説明さらには弁証をめざすものとして成立

することになる。

## (二)

そこで以下、『風土』(昭和10年)に至る風土論の成立の経過を追いながら、とりわけその方法と論述スタイルの特質を明らかにしたい。

出発点になった「国民性の考察」の講義ノートの構成は、最初に「(1)さまざまな国土に於ける自然と文化との関係」と題されて、「(a)東亜細亜(b)西亜細亜(c)欧羅巴」に分けられており、その三区分は後の風土の三類型に繋がっていく。そして次に、「(2)Nation及びNationalcharakterに関する在来の理論は“ところ”の問題をどう扱つてゐるか」という題が掲げられ、『風土』での「風土学の歴史的考察」部分に対応する内容が論じられている。<sup>3)</sup>

まず注目すべきは、ここでの考察の進め方について和辻が次のように述べていることである――

自分はこの考察を、自分の内に於て問題が生れ動いたまゝの経路に於て展開して見たいと思ふ。(1)問題発生地の地盤としての自分の体験。旅行中のさまざまな印象。(2)Nationalcharakterに関する在来の研究がこの問題にいかなる解決を与へるかの考察。(3)Leben或はDaseinのStrukturを考察する事によりこの問題に答へんとする自分の試み。<sup>4)</sup>

すなわち風土論へと結晶していく考察が、なによりも「自分の体験」という個人的な事情に発したものであること、そして、その考察が国民性、とくに日本の特異な国民性の説明に向けられたものであること、最後に、国民性を説明するための通路として、生活様式や構造の解明としての風土論が展開されていったこと、こうした点が語られているわけである。この論述の順序の妥当性については、とりわけ和辻の「体験」のあり方、その特異性と関わらせて吟味する必要があるが、いずれにせよこの三点の連関は風土論を考えるうえで必要不可欠な視点である。

この講義ノートで内容的に注目すべきは、国民性の考察の出発点として、その定義をマルクス(主義)から取ってきていることである――「こゝには、マルクスに従つてNationを次の如く定義して置こう。“Nationとは、土地、気候、種族等の特定のNaturbasisの上に、歴史的伝承、言語、性格の特徴などを同じくしつゝ、歴史的社会的発展過程によつて生じたまとまれる大衆(Massengebilde)である。”」<sup>5)</sup>

クローウの著書に拠りながらこうした定義を掲げた後、そのうえでしかし和辻は、「歴史的規定と地理的規定とが密接にからみ合つて国民の特殊性を形成」しているとすれば、

「マルクス風のNationの解釈に於ては、その説くところのNaturbasisが国民の特殊性に対していかに重大な意義を有するかを充分明かにしてゐないと思ふ。Nationの特殊性は確かに人間の労働の仕方、生産関係などに制約されている。人間の生産力、労働関係の変化に従つてNationの特殊性も又変化する。しかしそれ丈では時間的歴史的に現はる、特殊性は理解せられても、相対立する国民相互の間の特殊性が理解せられない」とマルクスを批判し、「或土地に結合してゐるといふ事が既に一つの宿命であり、それが労働の仕方のみならず歴史的伝承、言語、性格の特徴などを著しく制約」しているとして固有の自然との「戦い方」の重要性を強調する。<sup>6)</sup>

そして、「もし歴史的をnur einmaligと規定するならば、如上の特殊性はたゞ歴史的規定のみならずeinortlichとでも云ふべきもう一つの有力な規定を受けて」いるのではないのか述べ、そのことが「生自身の構造」に因るものであるとして、ハイデガーのIn-der-Welt-Seinの概念を掲げつつ、この空間的特殊性の「問題は“国民性”の考察に於て最も好き解決の手が、りを得る」と議論の方向を示唆している。<sup>7)</sup> 興味深いのは、ここでのマルクス（主義）批判が、いずれハイデガー自身にも向けられるようになることであるが、ともあれまず、最初の論議の布置がマルクスからの出発とその批判にあったことを確認しておく必要がある。

こうした見地から、「Wetter、Klima、Boden、Landschaftといふ如きものが、その最も根本的な姿に於て如何なるものであるかは、HeideggerのDaseinのAnalytikの如き方法に於て明かにさる、と思ふ」<sup>8)</sup>としてハイデガーの解釈学的現象学的手法に拠りつつ、遡ってWeltやUmweltについての分析がなされていく。そこで、この講義ノートの論述を、まず『風土』第1章「風土の基礎理論」の初出論文（「風土」『思想』1929年4月）の記述と比較し、その議論の特徴を押さえておくことにする。そのうえで、さらに『風土』（1935年）での最終的な叙述での変更について確認しながら、その間の推移の意味を全体として考察する。

講義ノート及び初出論文においては、『風土』におけるような空間性概念に基づく明確なハイデガー批判は見られず、むしろそのことが特徴となっているわけであるが、ここでもう少し綿密に明らかにしておくべきは、ハイデガー批判に至る議論の道筋についてである。結論を先に示しておけば、国民性の解明という根本動機が和辻をして風土という形での空間的特殊性への執着をもたらし、この風土性の重視が空間性そのものの意義の強調へと繋がっていくという思索の展開があったのではないのか。すなわち、国民的個性とその基盤である風土という空間的特殊性の軽視というマルクス批判が、その延長上にハイデガー批判へと接続しているのもあって、そこに和辻の一貫した志向を見いだすことができるように思われる。

さて、和辻はハイデガーを援用し、世界内存在としての現存在のあり方を説明する。われわれは世界Umweltとの配慮的besorgendな交渉Umgangの基本形態を、道具Zeugを介

した実践的なあり方・態度Zuhandenheitのうちに見る。ここから和辻は、ハイデガーに疑問を呈する仕方で、Wetter-Klima-Boden-Landschaftの位置づけを試みる。そのためにもまず、Besorgenそのものではなく、「Besorgenを引起すもの、といふよりむしろBesorgenの具体的な内容」<sup>9)</sup>に着目し、それを議論の中心に置こうとする。ここから出発して、和辻は道具的存在とその連関性の根底性を疑うに至る――

風は“帆をふくらませる風” “風車をまわす風”であるよりも、もつとUrsprünglichに、“肌をさす風”、“涼しい風” “柔らかい気持のい、風”である。かゝる点から見れば、Heideggerは先づZeugに於てinnerweltlichesを考へ、これをあらゆるinnerweltlichesに押しひろげ様としたと云へるであろう。こゝに自然をZeugとして考へるといふヨーロッパ人の特性が著しく現はれてゐると思はれる。<sup>10)</sup>

こうした見地から、さらに進んで和辻は、世界内存在をBesorgenにおいて把握すること自体に疑問を呈して、Daseinの構造に於て「UmweltnaturがたゞZeugcharakterに於てのみならず、geniessend (führend) にも見出されてゐることを注意するならば、かゝるUmweltnaturとしてのKlima-Landschaft等が、いかにDaseinにとつてbestimmendであるかが明かとなる」と述べて、<sup>11)</sup> 世界との受動的で感受的な連関の根源性を主張するのである。そして結論として和辻は、「DaseinのursprünglichなExistenzialenとしてのKlimatisch-landschaftliche Befindlichkeitが明かにされ、そこから種々なBefindlichkeitのTypen、従つてDaseinのTypenへの通路が開かれ得るだろうと思ふ。National-charakterといふ如きものは、かゝるDaseinのTypenとして掴まるべきものである」と、自らの議論の基本方向を示している。<sup>12)</sup>

ここには道具的交渉と日常性の分析のうちにく実存の事実性>を志向する初期ハイデガーの議論枠組みを超えて(むしろそれとは別個に)、情態性Befindlichkeitの受動性の側面を徹底させるなかで風土性(さらに国民性)を見出そうとする和辻の問題意識を窺うことができよう。こうした空間的特殊性としての風土性への着目は、繰り返し確認すれば、あくまでもDaseinのTypenとしてNational-charakterを基礎づけたいという根本の願望に発するものであった。後に『風土』で示されるような、世界とその根本規定としての空間性の主張とそれに基づくハイデガー批判は、こうした国民的特殊性への注視(=こだわり)の帰結であった。

### (三)

初出論文(「風土」)では、講義ノートの基調をなしていた情態性のカテゴリーを軸にした風土性についての現象学的な記述が継続されている。ここではまだ『風土』に見られる

「間柄」は現れてこない。むしろ強調されているのは、講義ノートの視点を承けつつ、*Beindlichkeit*が「感受的なかゝはり」として関心*Besorgen*の根源にあるものとして位置づけられ、さらに展開されていることである。

かくの如く或風土の特有の条件の下に存する「自然の産物」、穀物、野菜、果物、魚貝、鳥獣といふ如きものは、感受的なかゝりを地盤とする関心に於て食物として見出されたのである。<sup>13)</sup>

すべてのものは「感受的なかゝりを地盤とする関心」のうえに成り立ち、あらゆる現象が「感受し働く」という二重の構造において説明される。和辻はしばしば寒暑と服装を例に取って説明するのであるが、このように「風土との感受的なかゝりに於ける自己理解を最も根源的な存在の理解として確定」してしまつた以上、当然、この風土の型と対応するかたちで人間の自己理解の型が求められ、「人間精神の風土学」<sup>14)</sup>が国民性論として構想されることになる。

さらに、この初出論文と『風土』第1章「風土の基礎理論」での記述との関わりでとくに注目しておくべきは、「志向性」と「間柄」との関係をめぐつてのものである。初出論文は、基本的に志向性概念でもってその記述を首尾一貫させている。すなわち、寒暑についての経験を中心に分析し、そこに「志向的關係」を見いだしていく——「寒さを感じるといふ志向的経験に於て我々はすでに外に、寒さのうちへ、出てゐるおのれを見るのである。寒さを我々自身ではないが、しかも我々は寒さに於て先ずおのれを理解する。」<sup>15)</sup>こうした志向的関係についての現象学的記述を重ねていったうえで、風土との「感受的なかゝりを地盤とする関心」が根本的なものと見定められ、そこからまた道具的連関も捉え直されていく。そして最後に、人間が根本的に風土的規定のもとに己れを見いだすとすれば、「風土の型はやがて自己理解の型」とならざるをえないとして「人間精神の風土学」の構想が提示されたわけである。<sup>16)</sup>

『風土』第1章「風土の基礎理論」は、この初出論文の現象学的記述をそのまま基本的に踏まえながらも、しかしながら重要な変更を行っている。それが志向性と間柄の関係をめぐつてのものである。ここで問題の焦点になるのは、「世の中」の把握についてである。「世の中」、すなわち公共性や他者性について、初出論文では「志向的関係」を軸にした一貫した記述のなかで、この共同性の問題も処理されている。風土との感受的な関わりにおける共同性の契機について、和辻は次のように述べている——

……云はゞ世の中が公共的であることは予め前提されてゐるのである。しかし何故にかゝることが前提し得られるのか。それは「もの」とのかゝりがあるあらゆる契機に於てすでに共在する人を見出してゐるからである。…… [中略] ……

風土が見出されると同時にすでに「我々」の間のか、はりも見出されてゐる。従って「世の中」の現象はすでに初めより我々の間のか、はりを含んでゐるのである。が問題が風土にかんする限り、「共にある人間」の問題には深く立ち入る必要はないであらう。<sup>17)</sup>

共同性の問題は風土についての現象のなかに既に織り込まれて前提されているのであって、風土についての現象学的記述の障害となるようなものではない。したがって、風土を論ずる限りにおいて「共にある人間」の問題に「深く立ち入る必要はない」というわけである。ここにおいては、志向的關係についての現象学的記述と「共にある人間」が孕む問題性(=他者性)との間に横たわる難問は、そもそも課題としてその亀裂が感知されていないのである。

しかしながら、こうした態度は続かない。そのことは『風土』第1章での叙述の修正から窺うことができる。世の中の問題に「深く立ち入る必要はない」とした引用箇所を含む節が丸ごと削除され、寒暑をめぐる志向的経験についての現象学的記述を中断して、代わりに以下の一節が新たに挿入されている――

以上は寒さを体験する個人的意識の視点において考察せられたものであるが、しかしそこで「我々は寒さを感じず」と言い現わしても何ら支障がなかったように、寒さを体験するのは我々であって単に我れのみではない。我々は同じ寒さを共同に感ずる。だからこそ我々は寒さを言い現わす言葉を日常の挨拶に用い得るのである。……[中略]……「外に出る [ex-sistere]」ことを根本的規定としているのはかかる我々であって単なる我れではない。従って「外に出る」という構造も、寒気というごとき「もの」の中に出るよりも先に、すでに他の我れの中に出るということにおいて存している。これは志向的關係ではなくして「間柄」である。だから寒さにおいて己れを見いだすのは、根源的には間柄としての我々なのである。<sup>18)</sup>

ここには重要な変更が示されているわけであって、その意味について考えてみなければならぬが、まず留意すべきは、この一節が挿入されることによって論文の全体性格が変容することである。まさに叙述が分断された感をもつわけであるが、その主たる理由は、それまでの寒暑をめぐる志向的経験の記述を「寒さを体験する個人的意識の視点で考察せられたもの」として断じつつ、しかし同時に、すぐさま無媒介に(そこになんの問題もないかのように)「同じ寒さを共同に感ずる」として共同体的關係(=「日常の挨拶」)のことに移行していることによる。

和辻はここで、問題を「志向的關係」としてではなく、「間柄」として捉えるべきことを主張しているわけである。問われているのは、したがって、もはや寒暑の志向的關係に

ついでに現象学的記述ではなく、時候の挨拶を交わす共同体的関係における行為的連関そのものの叙述であるということになる。志向的関係の現象学的記述といったものは、もはや「個人的意識の視点」からの表層的な次元に関わる事柄でしかない。にもかかわらず、全体の論述そのものは引き継がれていくことになり、ここに不統一が生ずることにならざるをえない。

初出論文では、寒暑と並ぶ論題として「食物」が取り上げられて、食欲が生理的なものでなく、「味覚の充足への関心に外ならず」、食物とは「感受的なかゝり、はりを地盤とする関心において食物として見出された」ものであることが強調されていた。<sup>19)</sup>ところが同箇所が『風土』第1章では、論点は食物への「味覚の充足への関心」としての「食欲」ではなく、「料理の仕方」に移されている――

我々の食欲は、食物一般というごときものを目ざしているのではなく、すでに永い間にできあがっている一定の料理の仕方において作られた食物に向かう。……この料理の様式が一つの民族の永い間の風土的自己了解を表現する。<sup>20)</sup>

要するに、ここでは「関心」や「食欲」といった「感受的なかゝり」についての現象学的叙述ではなく、「家屋の様式」や「料理の仕方」をめぐって、実践的な行為的連関における風土的契機の意義の強調へと移行しているのであって、料理や家屋と風土性との関連についての解釈学的（ときに人文地理学的）な説明がなされることになる。また、「洋服は半世紀の間行われても依然として洋服である」所以がこうした風土的理由に基づくものとして、新たな事例として挿入されている。<sup>21)</sup>

かくして、ここで叙述は一転して、新しい節が「二 人間存在の風土的規定」として設けられ、人間存在の規定における風土性の意義が、「人間存在の構造の中でいかなる位置を占めるかを、おおよそ見当づけておかななくてはならない」として、いまや体系的見地において整理され論述される。<sup>22)</sup>そして『風土』とほぼ時を同じくする『人間の学としての倫理学』（昭和9年）の主張が、ここに挿入されることになる。

しかしながら、こうした部分的な修正にもかかわらず、全体の叙述そのものは変更されないままである。初出論文があくまでも「感受的なかゝり、はり」を注視してその叙述を一貫させているのに対して、『風土』第1章では「感受的なかゝり」に関わる記述を、例えば「感受的な自己理解」を「風土的な自己理解」に変更するといった仕方で修正され、そしてまた、全体の構成も、『風土』第1章では「一 風土の現象」と「二 人間存在の風土的規定」という形で二節に分けて、現象学的記述をもっぱら前節に振り分けようとしているのが見て取れるわけであるが、しかしながら結局は、その叙述は不整合と矛盾を孕んだままに終わっている。

さらに後で検討する問題点とも関わって、もう一例を追加すれば、朝の爽やかさについ

て、初出論文では、「この〔爽やかさの〕有り方はまさしく我々と空気との「か、はり」のうちに存する」とされていたのに対して、<sup>20</sup>『風土』第1章の叙述では、こうした「か、はり」ではなく、むしろ「朝の爽やかな気分が直接に我々の間の挨拶として表現せられるという事実」こそが本質的な事柄であると変更されている。そして和辻は、このとき、「直接に互いの間において「いいお天気で」「いい陽気になりました」などと挨拶する」のであって、「他人の心的状態に目を向けるというごとき手続き」を経るということがないことを強調する。すなわち、「感受的なか、はり」についての現象学的記述においても、また、「挨拶」をめぐる解釈学的説明においても、いずれの場合においても、こうした他者性に関わる「手続き」の意義が軽視されていることは、和辻の思考の性格を考えるうえで重要であろう。

#### (四)

それでは、こうした飛躍はいったいどうして生じたのであろうか。『風土』第1章「風土の基礎理論」は昭和4年の初出論文を昭和6年に改稿し、さらに昭和10年に補筆されて成ったものと著者自身が註している。この指示がほぼ正しいとすると、改稿と同時期、昭和6年末に岩波講座『哲学』に発表された「倫理学」が注目される。この論文は後に大幅に改作され、昭和9年に『人間の学としての倫理学』として刊行されることになるものである。

この二つの倫理学の改作の内実については次章で分析するが、ここで検討しておくべきは、昭和6年における「風土」初出論文の改稿と「倫理学」論文との関連であり、この段階でなされたと思われる「世の中」の「間柄」としての捉え直しと、そのことの思想的意義とについてである。問題は、志向性をめぐる現象学的記述と「間柄」についての解釈学的説明との関係についてである。

まず、この関係についての「倫理学」論文における中心的な主張を取り出してみよう。現象学的な志向性概念を批判して和辻は言う――

ものを志向するのは『孤立した我』ではなくして、『間柄に於ける我』である。従って志向は本来共同志向であり、その共同志向がそれぞれの我に於て私の志向として現はれるのである。かゝる見方は志向性を明かにした現象学の立場から見てもあまりに突飛であるかも知れない。何故なら現象学は、一切の学的定立及び自然的態度に於ける超越的存在定立を括弧に入れ、現象学的還元を行ふことによつて、志向性の場たる純粹意識に達するのであり、さうしてこの純粹意識はあくまでも個人的主観性に他ならぬからである。……〔中略〕……すべての『もの』が志向性に於て見出されるといふことは、すでに初めよりそれが人の間柄に於て見出されるというふことを含意

してゐるのである。

志向性は共同志向性として間柄に属する。しかし間柄自身は志向性ではない。志向性に於て見出されるのは『もの』と『我』であるが、しかし間柄に於て見出されるのは我々自身である。『もの』ではなくして『人』である。・・・[中略]・・・人間の学が実践的な主体の学であると云はれる時、我々はこの『主体』を右の如き実践的な間柄として把握せねばならぬ。<sup>20)</sup>

ここで和辻は、「志向性と間柄との判然たる区別」の意義を強調する。「人間の学」としての倫理学の構想を具体化するなか、実践的な行為的連関を「間柄」として把握する鍵概念が明確になるにつれて、それまで「世の中」として志向性のなかに埋もれていた共同性が、まさに「間柄」として立ち上がってくる。風土的現象のなかに埋め込まれていた「我々の間のか、はり」は、人間の学の構想のなかで「間柄」として捉え直され、取り出されることになる。

倫理学の確立は、したがって、志向性の現象学から間柄の解釈学への転換であった。「もの」と「我」との志向的關係は、われわれの間柄のうえに、それを根底にして初めて成り立つ關係に他ならない。志向性の現象学は、いまや個人的主観性の純粹意識への還元という操作の結果として生じた二次的な所産でしかない。こうした現象学批判のなかから和辻自身の解釈学的立場が確立されることになる。

こうした展開は一見、明瞭なように思える。しかしながら、この飛躍は微妙な問題を孕んでいる。既に指摘したように、個人意識の立場として現象学を切って捨てたにもかかわらず、志向性の現象学的記述はそのままに残っていた。そこに不統一が生じた。さらに言えば、新しい解釈学的立場が、本当に質的な飛躍と言えるような展開であったのかについても問われなければならない。

この点について、「風土」初出論文での「世の中」から、「倫理学」での「間柄」へと転換するなかで、むしろ継承性の側面が注目されるべきであろう。すなわち、風土論から倫理学への展開において、その飛躍を準備し、さらにそれを規定したものが問われなければならない。出発点は国民性と風土の関わりについての、留学という個人体験に裏打ちされたヴィジョンであった。まさに個人体験に基づくことによって『風土』は国民性をめぐる特異な著作となった。また、たしかに和辻の文化的感受性は、この書をしてユニークな比較文明論の文献たらしめたと評価することもできよう。しかし、繰り返せば、それは多くの限定を伴ってのことである。

個人体験への執着は、風土的現象への着目と結合して、和辻の中心構想において重大な理論的問題点を生み出すことになった。とりわけ、風土的視点から眺められた人間の共同生活は、いわば風土に埋め込まれたものとして、まさに「世の中」として現象する。たしかにそれは、和辻自身によって志向性の現象学として批判されることになったわけである

が、しかし、その克服が十分に果たされたとは言い難いのである。むしろ、そこに基本的な連続性を認めることが至当であろう。「世の中」の志向性は「間柄」の共同志向性へ、個人意識の現象学は共同体の解釈学へ、滑らかに接続していく。そこには本来的な理論的なく切断がない。

何故、他者を析出する契機が絶えず背後に退いていくのか。結論的に云えば、和辻の強い個人意識に発した国民性と風土の問題構成が、他者を析出する「手続き」を曖昧にさせていたと考えられる。既に述べたように、もちろんその背後には、資本主義文明に対する和辻の＜批判＞が、共同性への強固な志向が働いていたわけであるが、そうした要因も合わせて、改めて、倫理学体系のなかに風土論が組み込まれていく過程が問題となるであろう。風土から出発し、風土を組み込むことで、和辻の倫理学体系はその固有の性格を付与されることになる。

『風土』成立の前段階を探ってきたが、風土とモラルの関わりを、そこで次に倫理学体系の形成の側面から検討してみなければならない。

#### 註

[以下、和辻からの引用は、特に断らない限り、岩波書店版第3次全集（全25巻、別巻2巻、1989-1992）に拠る。]

- 1) 『全集』別巻1、483頁。
- 2) 同上、379頁。
- 3) 講義ノートの概要については、全集解題（米谷匡史執筆）参照。同上、481頁以下。
- 4) 同上、379頁。
- 5) 同上、375頁。
- 6) 同上、378頁。
- 7) 同上、378-9頁。
- 8) 同上、380頁。
- 9) 同上、389頁。
- 10) 同上、399-400頁。
- 11) 同上、392頁。
- 12) 同上、394頁。
- 13) 同上、398頁。
- 14) 同上、403頁。
- 15) 同上、397頁。
- 16) 同上、403頁。
- 17) 同上、401頁。

- 18) 『全集』第8巻、10頁。
- 19) 『全集』別巻1、398頁。
- 20) 『全集』第8巻、13頁。
- 21) 同上、13頁。
- 22) 同上、14頁。
- 23) 『全集』別巻1、402頁。
- 24) 「倫理学」(『岩波講座 哲学』1931年)、76-8頁。

### Summary

The concept of <climate> had played a leading role in the formation of Watsuji's *Rinrigaku* (ethics). It was based on the strong awareness of <nationality>. However, as a result, some theoretical problems were brought to his system of *Rinrigaku*. Especially the central difficult issue was the problem of <otherness of person>.